

和辻哲郎と比較文化の問題

小坂 国 継

序

發揮している。

和辻哲郎といえ、あの『人間の学としての倫理学』（昭和九年）や浩漣な『倫理学』（上巻昭和十二年、中巻十七年、下巻二十四年）から受ける倫理思想家としてのイメージが非常に強いが、しかし彼の資質と持味が存分に發揮されているのは、むしろ広い意味での「文化」の領域においてであると言える。『日本古代文化』（大正九年）や『日本精神史研究（正・続）』（大正十五年、昭和十年）に代表される日本文化の研究、また『原始基督教の文化史的意義』（大正十五年）や『原始仏教の実践哲学』（昭和二年）、さらには『孔子』（同十三年）や『ホメーロス批判』（同二十一年）等の著作にあらわされている、世界の諸文化の源流の研究は、文化史家ないしは「文化」の哲学者としての和辻の力量と造詣の深さを遺憾なく

とながら、日本および世界の諸文化の根源の研究は、当然のことながら、同時にそれら諸文化相互の比較の問題に関わってくる。特に和辻のように、もともと己れが日本人であることに對して強烈な意識をもっており、また現代世界において日本文化が担っている意義について並々ならぬ関心をもっているような哲学者にとってはなおさらそうである。すでに大正八年、和辻三十歳のときに書かれた『古寺巡礼』には、美術という限られた分野においては、あるが、そのような比較文化的考察の端緒がみとめられる。また、翌年に出た『日本古代文化』においても、上代の日本民族の特性の叙述からシナ人・大陸人との比較文化論にまで論議が展開されている。

けれども、世界の諸民族の国民性と文化の比較の問題が自覚的

に追求されるようになったのは昭和二年一月から同三年七月までのヨーロッパ留学を契機としてであった、ということができよう。この一年半余の旅の体験や見聞をもとにして名著『風土』（同十年）が上梓された。

一

『風土』は昭和三年九月から昭和四年二月にかけての京都大学での講義草案がもとになってできたものである。その成立の事情をここで詳述する余裕はないが、最初はただ彼の体験したさまざまな風土の印象に即して自然と国民性、或いは自然と文化との關係が論じられていたが、後にハイデッガーの現象学的解釈学を風土考察の「方法論」として取り入れることによって、「人間存在の構造契機」としての、もしくは「人間の自己了解の仕方」としての「風土」という考えに到達したらしい。

和辻の言う「風土」は自然的環境や自然科学的对象としての「風土」ではない。それは「人間学的考察」という副題からも理解されるように、「人間の自己了解の仕方」としての「風土」である。したがって、和辻の風土論は、例えばさまざまな風土が人間の歴史的・社会的現実にとどのような影響を及ぼすかを見ようとするのではなく、そのようなさまざまな風土の内にもさまざまな「人間の在り方」を見ようとするのである。ちょうどハイデッガーが『存在と時間』において人間の主体的存在構造を時間性とし

て把握したのに対して、和辻はそれを空間性すなわち風土性において捉えようとするのである。

良く知られているように、『風土』においてはモンスーン・沙漠・牧場という三つの類型が区別されている。モンスーンというのは南洋、特にインドにみられる季節風であって、「暑熱と湿気との結合」をその特性とするものである。この「湿潤」は一方では自然の恵みをもたらすとともに、他方では大雨、洪水、旱魃等の自然の暴威をも意味している。したがって、この地域の人間は受容的・忍従的であることをその特性としている。それ故に、そこで産み出される文化も「感情の横溢」、「意志の弛緩」、「歴史性の欠如」を特徴としている。

第二の類型はアラビア・アフリカ・蒙古などにひろがる沙漠地帯である。モンスーンがその「湿潤」によって特徴づけられるとすれば、沙漠はその乾燥によって特徴づけられる。それは文字通り生氣のない荒々しい風土である。ここではモンスーン地帯のように、外なる自然の生産を恵みとして待ち望むことはできないから、人間と世界との關係は対抗的・戦闘的となり、また自然との戦いにおいて人は団結を要求され、部族の命令に絶対服従を強いられる。したがって、そこで産み出される文化は実際的・意志的であり、自然に対して対抗的であること、著しく人工的であることを特徴としている。

第三の類型はヨーロッパであって、これは「牧場」型と呼ばれ

る。南欧の明朗と北欧の陰鬱の違いはあるが、ヨーロッパに共通しているのは夏の乾燥と冬の雨期であり、特に夏の乾燥は雑草の繁茂を妨げる。総じてヨーロッパにおいてはモンズーンや沙漠におけるような自然の暴威はなく、自然は人間に対して従順であるところ、自然が従順であるということは自然が合理的であるということと結びつく。故に、このような風土において初めて理性の光が輝き出、自由の精神が育まれた、と和辻はいう。

『風土』には以上の三つの類型の他に、さらにモンズーン型の特殊形態としてシナと日本がつけ加えられている。シナは、例えば揚子江流域にみられるごとき「空漠たる単調」さの故に、モンズーン型特有の受容的・忍従的性格はこの「空漠たる単調」に堪えざる「意志の持続、感情の放擲、従ってまた伝統の固執、歴史的感覺の旺盛」となって現われ、この点でインドの人間と対照をなしている。

最後に日本はモンズーン地帯であって、夏には突発的な台風が、冬には大雪が訪れるという特殊構造を担っている。それ故、受容的・忍従的な存在の仕方の二重性格の上に、さらに熱帯的・寒帯的、季節的・突発的といふごとき特殊な二重構造が加わっている。そして、そこから「しめやかな激情」「戦闘的な恬淡」という特殊な国民的性格が形成された、と和辻は主張している。

和辻の風土論は、谷川徹三氏をして「随所にイデエを見る眼」と言わしめた、あの卓越せる直観力と格調高い文体によって極めて魅力のある読物となっており、事実今日まで多くの読者を獲得してきた。安倍能成は和辻の風土論が単に独創に富んでいるのみでなく、芸術的な感受力と学問的な才分に充ちていると評価しているし、唯物論者戸坂潤でさえ、「風土を見出したこと、風土から日本を見たこと、これは和辻氏の没することのできない業績であらう」と述べ、その獨創性を認めている。

けれども、同時に和辻の風土論はいくつかの問題点をかかえていることも否定できないところである。実際、彼の所論に対しては今日まで様々の観点から批判がなされてきた。そしてそれらの批判は概ね、正鵠を得ており、また和辻風土論の本質をついている。したがって、それらの批判を逐一吟味し検討してみることは充分に意義あることと思われる。しかし、ここでは当面のテーマである風土と文化との関係という観点から、主として風土的決定論の問題をとりあげて検討してみたい。

和辻は前述した風土の三類型と、モンズーン的風土の特殊形態としてシナと日本の風土を論じた後、「芸術の風土的性格」を論じている。そのところで彼は、芸術の特殊性と芸術家の想像力の特殊性とが如何に風土の特殊性によって規定されているかを豊富な事例を挙げながら説き明かしている。彼の考えでは、風土の特殊性は世界が一つになったように見える今日においても決して消

滅するものではなく、人は依然としてその制約を受け、依然としてそこに根をおろしているのであって、かような風土的特殊性を克服することは、いわばブルジョアを克服することよりも困難である。それだから、「我々はかかる風土に生まれたという宿命の意義を悟り、それを愛しなくてはならない」⁽⁴⁾。

これが、和辻の風土論が「風土の決定論」とか、「風土の宿命論」とか批評されるようになった要因である。

たしかに、和辻の風土論には全体としてこのような宿命論的傾向があることは否定できない。もともと『風土』は世界の諸民族の国民性と文化とが、如何にその風土的特殊性と密接に連関しているかを論じた書物であるから、そのような決定論的傾向が見られるのはむしろ当然といえる。けれども、和辻は彼の風土論において、我々是我々の国土を牧場に変えることができないように、

我々是我々の風土的特殊性を克服することができないという宿命論を展開しているわけではない。彼が主張しているのは、むしろ反対に、人間はその風土的特殊性を止揚し、それを積極的に生かすべきだということである。和辻の言葉を借りて言えば、ちょうど「聴覚の優れた者において音楽の才能が最もよく自覚され、筋肉の優れた者において運動の才能が最もよく自覚される」ように、「牧場的な風土においては理性の光が最もよく輝き出で、モンスーンの風土においては感情的洗練が最もよく自覚される」⁽⁵⁾。だとすれば、我々は理性の最も輝くところから己れの理性の開発を学び、

また感情の最もよく洗練されているところから己れの感情の洗練を学ぶべきであろう。風土的特殊性が諸国民にそれぞれ異なった長所を与えたとすれば、我々はまさにその点において己れの短所を自覚させられ、こうして相互に学び合うことができるであろう。また、こうすることによって我々は風土的特殊性を克服していくことも可能である。

しかしながら、風土的な限定を自覚することによって、その限定を超えたからと言って、風土的特殊性そのものがなくなるわけではない。否、むしろそれによって一層よくその特性が生かされてくるのである。例えば、我々是我々の国土を牧場に変えることはできないが、しかし牧場的な性格を獲得することはできるのであり、またそうすることによってモンスーンの風土に特有な感情的洗練を自覚し、それを一層よく磨くことができるのである。こうして我々是我々の風土的特殊性を「止揚しつつ生かすこと」によって他国民のなし得ない特殊なものを人類の文化に貢献することができるであろう。そして又それによって地球上の諸地方がさまざまに特徴を異にするということも初めて意義あることとなる⁽⁶⁾。と和辻は主張している。

三

以上のように見てくれば、和辻の風土論は世界の諸民族の個性と文化の独自性を力説するポジティブな理論であって、一般に言

われている如きネガティブな「風土的宿命論」ではないということとは明らかである。また、このような彼の所論の根底には、近代の西欧の歴史観に見られがちな、西欧中心的な、歴史の単系的発展説に対する批判と反撥とがこめられていることも明らかである。「世界史は風土的に異なる諸国民にそれぞれの場所を与え得なくてはならない」という彼の主張は、文化と歴史についての彼の考え方を端的に表現しているといえよう。

もともと人間が時間的・空間的な二重構造をもっているように、文化もまた歴史的・風土的な二重構造を有している。文化においては歴史性と風土性とはいわば楕の両面であって、その一方だけを引き離すことはできない。すなわち歴史は風土的歴史であり、風土は歴史的風土である。したがって、人類の文化は単系的な発展段階において捉えられるべきではなく、多系的な発展段階において捉えられなくてはならない。人類の文化はどの民族の文化においても独自の個性をもつものとして平等の価値をもっているはずである。和辻がカントやヘーゲルのように、諸国民の文化を人類の究極目的への発展の単なる一過程として、「時間的継起の秩序」において捉える考え方に反対して、ヘルダーのように、これを「空間的並存の秩序」において、それ自身に目的としての資格あるものとして捉えなければならぬ、と主張するものこのためである。

このように、和辻は世界における諸文化の並存を、つまり世界

における諸文化の並行的発展を主張するのだが、しかし、だからといって彼は人類の諸文化の交流や接触の意義を否定しているわけではない。彼が力説しているのは、如何に世界が今日一つになつたように見えても、それによって風土の特殊性がなくなるわけではないということであり、また、このような特殊性を無視した文化の交流は単なる文化の移植に終つてしまい、風土的生の深みから生い育つたものとはならないということである。

しかしながら、視点をかえて見れば、かような和辻の主張の背後には、日本人としての強烈な自意識があったことは否定できないであろう。和辻はヘーゲルの歴史哲学に触れて、「我々はヘーゲルの如く欧州人を〈選民〉とする世界史を是認することができない。欧州人以外の諸国民を奴隷視するのはすべての人の自由の実現ではない」と批判しているけれども、そこには非欧州人としての和辻の自己主張がみとめられる。しかも、そのような日本人意識は、「日本精神」という得本のしれない言葉が流行した、当時の徐々に軍国主義化しつつあった世相と無関係ではないと思われる。和辻はこの頃、いくつかの時評的論文を書いているが、それらはいずれも政治的イデオロギーとは一線を画して、もっぱら文化のレヴェルにおける国民的自覚を呼びかけたものであった。しかし、そこには西欧の文化や精神の評価に関して、或る種の偏向がみられると同時に、日本文化の伝統や特殊性、或いはそれが現代において担っている役割を過大に評価する傾向がみられる。

例えば、「日本精神」(昭和九年)にでてくる例の「日本文化の重層性」の理論は、余りにも日本の特殊性を無批判的に強調し美化する傾向が見られるし、また、「文化的創造に携わる者の立場」(昭和十二年)のなかで主張されている、現代世界で日本が担っている役割、すなわち「世界史のすべての優れた文化を新しい統一にもたらず」という世界的任務の主張には、西欧中心の歴史観に対するむきだし¹⁾の対抗意識、日本人としての過度とも思われる気負いが感じられる。このような傾向は『風土』においても随所に見られるところである。「世界史は風土的に異なる諸国民にそれぞれ場所を与え得なくてはならない」という主張はもつともであるが、しかし、日本の風土や文化の特殊性を過度に強調し美化することは、日本の、したがってまた世界の諸文化に対する公平な評価を見誤らせる結果になりかねない。また、世界の文化の多系的発展、もしくは空間的並在の秩序を強調する和辻の文化論は、西欧中心主義の文化観に対する非西欧人の側の自己主張である点は認めても、それをあまり強調すると一種の文化的、相對主義に陥る危険性がある。

文化においては、その地域的・特殊的性格が強調されなければならぬと同時に、その世界的・普遍的性格が論じられなければならないであろう。しかし、和辻の文化論は文化の風土的特殊性だけを強調するきらいがある。それは彼が文化の主体を民族と考えていたからではなからうか。しかし、文化の担い手は民族であ

るとともに個人でもある。しかるに民族としての人間の特性は風土的特殊性によって説明され得ても、個人としての人間の特性は単なる風土的特性によっては説明しきれるものではない。和辻は人間存在の個人的・社会的構造、換言すれば時間的・空間的構造を単に個人的・時間的側面からのみ捉えようとするハイデッガーの人間存在論の抽象性を指摘しているが、逆に和辻自身が人間をもつばら社会的・空間的側面からのみ捉えており、したがってハイデッガーとは反対の意味での抽象に陥っているといえないであろうか。和辻が文化の風土的特殊性のみを強調し、文化の普遍性の問題には関心を示さなかったのも、この辺に原因がありそうである。

(1) 谷川徹三『和辻哲郎全集』第八巻解説。

(2) 安倍能成「豊富なる独創——和辻哲郎教授の『風土』を讀みて——」

(3) 戸坂潤「和辻博士・風土・日本」(『世界の一環としての日本』所収)

(4) 『風土』岩波文庫、二四三—二四四頁。

(5) 同書、一四三頁。

(6) 同書、二四四頁。

(7) 同書、二七八頁。

(8) 同書、二七八頁。

(こさか・くに) 近代日本思想史、日本大学助教授